

開業医医療研究会報告

地域の中での小児心身医療

： 中学1年生の不定愁訴アンケート調査の経年的変化および教師との交流

齋藤久子

Key Words: 中学生, 不定愁訴アンケート調査
地域医療, 不登校, ガイダンス

子どもクリニック (西尾市)

はじめに

西尾幡豆医師会では学校保健事業の一つとして1989年より中学1年生に不定愁訴のアンケート調査を施行している。目的は、不登校児の背景の実態を知ること。結果を学校にフィードバックして、事後指導をすることにより、地域医療に役立たせるためである。

教師との交流については、1991年に西尾市教育委員会を通じて心因性疾患児について、教師の意識調査を行った。これは、教師が不登校の問題をどのように捉え、対応しているかを調査し、今後の参考にするためである。この調査結果を踏まえて、不定愁訴アンケート調査の事後指導の参考にしている。

西尾幡豆地区は西尾市1市と幡豆郡の一色、吉良、幡豆の3町からなり、名古屋の東南、三河に位置している。西尾市は農業、商業、工業のバランスのとれた人口10万人の小都市である。幡豆郡は人口約6万の農・漁業を中心とした町である。

今回は、不定愁訴アンケート調査の1995年度の現状、とくに男女差、および1990～1995年度の年次変化と西尾市内校と市外校(郡部)との地域差を中心に述べる。1991年度のみは、データが不完全であったので除いた。

1. 不定愁訴のアンケート調査

この調査のきっかけは、1976年に不登校児の背景として中学生の実態は、どうかをみるためにアンケート調査を行った。このときのアンケートの内容は、表1のような項目に2、3項目を加えた

不定愁訴を中心にしたものであり、某中学校の1年生(313例)に施行した。1990年に再調査を行い1976年度と比較したところ、1990年度は、愁訴率は有意に増加項目が多く驚かされた。

対象は西尾幡豆地区10校(市内6校、市外4校)の1年生である。年度別の対象例は1990年(市内校:1,356、市外校:764)、1992年(市内校:1,323、市外校:818)、1993年(市内校:1,250、市外校:791)、1994年(市内校:1,179、市外校:770)1995年(市内校:1,186、市外校:731)である。

方法

毎年10月の運動会後の時期を選び、養護教諭主導で全員に行っている。従って不登校児には施行していない。項目は42項目であり「良くあり」、「時々あり」、「なし」の3段階で答えられるようにしてある。「良くあり」の項目のみをとりあげて、男女別・地域別・年度別に整理し、比較検討をした(表1)。

結果

1) 1995年度の男女差

市内校の男児(597人)、女児(589人)の差では(表2)、男児に有意に多かったのは「口がカラカラに渴く」の1項目で女児に多いのは「心配事がある」「劣等感を持つ」「めまい、立ちくらみがある」「いじめられたことがある」の4項目であった。

市外校の男児(376人)、女児(355人)の差では男児に多かったのは「一つのことに集中できない」のみで女児に多いのは「何となく不安な気持

表1 アンケートの内容

1) 一つの事に心を集中できない。	22) 疲れた感じがする
2) なにか心配事がある	23) 口がカラカラに乾くことがある
3) テストが気になり頭から離れない	24) 喉が、つまった感じがする
4) なんとなく不安な気持ちになる	25) 吐き気がすることがある
5) 少しの事でも気になる	26) テストになると下痢をする
6) 他人が話していることが気になる	27) 首、肩がこる事あり
7) 受験について家族が心配するのが心の負担になる	28) お腹が痛むことがある
8) ちょっとの事で腹がたつ	29) 身体のアチコチが痛むことがある
9) 物音に敏感になる	30) テストになると吐き気がする
10) 何をしても楽しくない	31) 心臓がドキドキすることがある
11) 自分の気持ちが家族や友達に理解してもらえない	32) 急に身体が熱くなったり、寒くなったりする
12) なにもしたくないことがある	33) 胸や心臓がしめつけられる
13) 劣等感をもちことがある	34) 息が苦しくなる
14) 将来に希望がないと思う事がある	35) 身体がしびれることがある
15) 死にたい気持ちになる事あり	36) めまい、たちくらみがある
16) 自分がノイローゼかと思うことがある	37) テストのときに頭痛がする
17) 朝、登校がいやなことがある	38) よく眠れないことがある
18) 朝起きた時気分が良くない	39) 頭痛、頭重がある
19) 勉強に意欲がない	40) 長く立っていると、疲れる
20) 勉強は解らない所が多い	41) 朝食はたべないで登校する
21) 友達関係がうまくいってない	42) いじめられたことがある

表2 1995年度の愁訴頻度の男女差（市内、外校別）

項 目	市 内 校			市 外 校		
	男児	女児	有意水準	男児	女児	有意水準
	% N : 597	% N : 589		% N : 376	% N : 355	
集中できない				15.2	8.7	>*
なにか心配ことがある	5.4	8.7	<*			
なんとなく不安な気持ちになる				7.7	15.5	<***
少しの事でも気になる				8.2	15.6	<*
劣等感をもちことがある	6.7	11.0	<*	11.2	19.2	<*
口がカラカラに乾くことがある	9.5	4.1	>*			
首・肩がこる事あり				15.4	22.8	<*
お腹が痛むことがある				10.3	19.8	<***
めまい、たちくらみがある	4.5	9.3	<*	9.3	16.6	<*
頭痛、頭重がある				2.1	9.6	<***
いじめられたことがある	2.0	4.4	<*			

*p<0.05 **p<0.001 ***p<0.0001

(不等号の方向は%の大小を示す)

ち」、「少しのことでも気になる」、「劣等感をもちことがある」、「首、肩がこる」、「お腹が痛むことがある」、「めまい立ちくらみがある」、「頭が重かったり、痛かったりする」の7項目で、いずれも女

児に訴えは多かった。

2) 年次変化

①1976年度と1990年度の差

調査のきっかけとなった1976年度と1990年度の

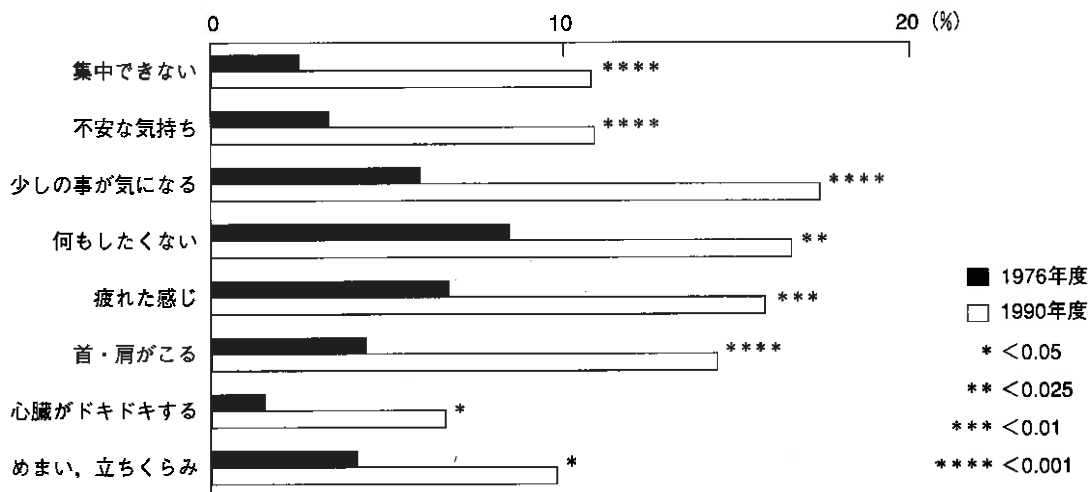


図1 1976年度より有意に増加した項目 (子どもの心とからだ. 1993,Vol.2,10より)

表3 西尾市内校(6校)と市外校(4校)の愁訴頻度の比較 (1995年)

項目	市内校 % N: 1186	市外校 % N: 731	有意差
集中できない	8.8	12.0	< **
心配ことがある	7.0	13.0	< ***
テストが気になる	7.7	19.2	< ****
不安な気持ち	6.7	11.5	< **
少しの事でも気になる	12.6	19.6	< ***
他人の話が気になりイライラする	7.3	11.4	< *
少しのことで腹が立つ	9.1	14.6	< **
物音に敏感	13.4	19.4	< **
気持ちを家族や友達が理解せず	4.3	9.3	< ****
なにもしたくない	10.6	20.8	< ****
劣等感がある	8.9	15.0	< ****
死にたい気持ちになる	3.5	6.0	< *
朝、登校するのがいや	4.6	11.5	< ****
朝、起きたとき気分がよくない	4.6	11.5	< ****
勉強に意欲がない	8.3	16.3	< ****
勉強は解らないところが多い	10.3	14.1	< *
疲れた感じ	11.1	22.4	< ****
吐き気がすることがある	1.5	3.1	< *
首、肩がこる	12.5	19.0	< ****
お腹が痛むことあり	8.0	14.6	< ****
身体のあちこちが痛む	4.3	9.4	< ****
心臓がしめつけられる	1.9	9.3	< *
息が苦しくなる	2.0	4.1	< *
めまい、たちくらみがある	6.9	12.9	< ****
長く立っていると疲れる	6.3	11.8	< **
いじめられたことがある	3.2	6.2	< *

表4 市内校(6校)と市外校(4校)の愁訴頻度の比較 (1990年)

項目	市内校 % N: 1356	市外校 % N: 764	有意差
集中できない	8.8	14.1	< **
なんとなく不安	9.7	13.1	< *
少しの事が気になる	15.4	20.0	< *
他人の話が気になりイライラする	8.6	13.4	< **
少しの事で腹が立つ	13.2	16.2	< *
なにもしたくないことがある	15.0	19.4	< *
朝、登校するのがいや	5.7	10.7	< ***
朝、起きたとき気分がよくない	8.0	11.0	< *
勉強に意欲がない	10.7	15.1	< *
疲れた感じ	13.7	19.4	< **
口がカラカラに乾く	8.0	10.6	< *
喉が詰まった感じ	3.6	6.2	< *
吐き気がすることあり	3.1	5.4	< **
首、肩がこる	12.5	18.8	< ****
お腹が痛む	10.0	15.1	< **
心臓がドキドキする	5.8	8.5	< *
急に身体が熱かったり寒かったり	3.9	6.5	< *
身体がしびれることあり	3.2	5.0	< *
めまい、たちくらみがある	11.8	11.8	< *
頭重、頭痛がある	4.4	7.1	< *
長く立っていると疲れる	7.4	13.0	< ****

<表3、表4共通>
 * p<0.05
 ** p<0.001
 *** p<0.0001
 **** p<0.00001 (不等号の方向は%の大小を示す)

表5 市内校(6校)と市外校(4校)の愁訴頻度の比較 (1992年)

項目	市内校 % N:1323	市外校 % N:818	有意差
なんとなく不安な気持ち	7.6	11.4	<*
少しのことでも気になる	15.7	19.3	<*
なにもしたくない	12.2	17.0	<*
朝、登校するのがいやなことあり	6.5	10.4	<*
朝、起きたとき気分がよくない	7.0	9.8	<*
疲れた感じがする	12.1	20.2	<****
口がカラカラに乾く	4.8	9.9	<****
喉が詰まった感じがする	3.4	6.5	<***
吐き気がすることがある	3.3	5.1	<*
テストになると下痢をする	0.8	1.3	<*
お腹が痛むことがある	10.1	16.4	<***
身体のあちこちが痛む	6.4	10.0	<*
心臓がドキドキすることがある	6.4	8.9	<*
急に体が熱かったり寒かったり	3.1	5.4	<*
息が苦しくなる	1.7	3.3	<*
手、足がしびれる	3.5	6.5	<*
めまい、たちくらみがある	8.4	12.8	<***
よく眠れないことがある	5.1	8.3	<*
長く立っていると疲れる	7.2	9.9	<*
いじめられたことがある	8.8	3.3	>****

* p<0.05 (不等号の方向は%の大小を示す)
 ** p<0.001
 *** p<0.0001
 **** p<0.00001

表6 市内校(6校)と市外校(4校)の愁訴頻度の比較 (1993年)

項目	市内校 % N:1250	市外校 % N:791	有意差
一つの事に集中できない	9.6	12.6	<*
他人の話が気になりイライラする	10.6	13.9	<*
なにもしたくないことあり	15.2	20.2	<*
朝、登校がいやなことあり	8.8	11.5	<*
疲れた感じ	15.1	23.5	<****
口がカラカラに乾くことあり	6.4	13.1	<****
喉が詰まった感じがある	4.3	7.8	<***
吐き気がすることがある	2.9	5.2	<*
首、肩がこるこがある	13.5	20.0	<***
お腹が痛むことがある	10.1	13.8	<***
身体のあちこちが痛むことあり	7.0	13.1	<*
心臓がドキドキすることがある	7.9	13.5	<***
急に体が熱かったり寒かったりする	5.0	9.1	<***
胸や心臓がしめつけられる感じ	2.3	4.3	<*
めまい、たちくらみがある	9.0	15.4	<****
テストの時に頭痛がする	1.4	2.9	<*
よく眠れないことがある	6.6	9.0	<*
頭重、頭痛がある	4.5	7.8	<*
長く立っていると疲れる	7.7	11.4	<***
朝食は食べないで登校する	7.0	3.4	>***

* p<0.05 (不等号の方向は%の大小を示す)
 ** p<0.001
 *** p<0.0001
 **** p<0.00001

データのうち、有意に増加していた項目を示す(図1)。項目の内容は、「一つのことに集中出来ない」、「何となく不安な気持ち」、「少しのことが気になる」、「なにもしたくない」、「疲れた感じ」、「首、肩がこる」、「心臓がドキドキする」、「めまい立ちくらみがある」の8項目であった。

②年度別の市内・市外校の比較

地域差と年度の違いを検討した。1995年度は市内6校と市外4校とを比べると、市内校は愁訴率が明らかに少なく、26項目で有意差がみられ、差のあった全項目で愁訴は少なかった(表3)。市内校、市外校の差が大きかったので、過去4年間1990・1992・1993・1994年の差を調べた。1990年度は21項目で市外校が有意に訴えは多く、市内校が多い項目はなかった(表4)。1992年度は20項目で差が

みられ、そのうち1項目「いじめられたことがある」のみが市内校で有意に多く、他は市外校が多かった(表5)。1993年度は20項目で有意差があり、そのうち「朝食は食べないで登校する」のみが市内校では多かった(表6)。1994年度は12項目で差があり「受験を家族が心配するのが、心の負担」のみが市内校で多かった(表7)。以上、市内・外校の差は、1994年度までは減少してきたようにみられたが、1995年度は両群の差は大きくなっている。

③市内6校の年度別の差(表8)

1995年度と他の年度の差をみた。1995年度に増加していたのは4年間のうち1994年度の「急に体が暑かったり、寒かったりする」のみであった。1995年度に比べ1993年度は訴えが多く、ついで、

表7 市内校(6校)と市外校(4校)の愁訴頻度の比較 (1994年)

項目	市内校 % N:1179	市外校 % N:770	有意差
心配事がある	8.3	11.3	<*
受験を家族が心配するのが負担	8.8	6.4	>*
なにもしたくないことがある	11.5	19.0	<****
劣等感をもつことあり	7.5	12.6	<***
自分がノイローゼかと思う	0.7	1.9	<*
朝、登校するのがいや	7.0	12.5	<***
朝、起きたとき気分がよくない	8.3	11.8	<*
疲れた感じ	14.2	18.1	<*
テストになると下痢	0.4	1.8	<*
急に身体が熱かったり寒かったり	3.0	6.0	<*
よく眠れないことあり	5.4	8.4	<*
長く立っていると疲れる	5.8	10.6	<***

* p<0.05 (不等号の方向は%の大小を示す)
 ** p<0.001
 *** p<0.0001
 **** p<0.00001

1990年度が多い。4年間ともに1995年度より多い項目は「朝、起きたとき気分がよくない」勉強に意欲がない」、「吐き気がすることがある」の3項目であり、1992・1993・1994年の3年間で多かった項目は「朝、登校がいやなことがある」、「いじめられたことがある」であった。1993・1994の2年間で多かったのは「テストが気になる」、「不安な気持ち」、「自分の気持ちを家族・友人に理解してもらえない」、「疲れた感じ」の4項目であった。すなわち、朝、起きたときに気分が良くないとか、登校に抵抗があること、勉強に意欲を示せなかったり、疲れた感じがするなどの不登校と関連性の多い項目では1995年度に訴えが少なくなっている。もう一つの注目点は、いじめが減少していることがあげられ、学校側での努力が推測された。

表8 1995年度の愁訴頻度と1990～1994年度の比較 (西尾市内6中学)

項目	1995年 %	1994年	1993年	1992年	1990年
集中できない	6.9		<*		
心配事がある	7.0		<*		<*
テストが気になる	7.7	<*	<*		<***
不安な気持ち	6.7	<*	<***		<*
少しの事が気になる	12.6		<****	<*	<*
他人の話が気になりイライラする	7.3		<*	<*	
受験を家族が心配するのが負担	8.4				
少しの事で腹がたつ	9.1		<****	<*	<*
物音に敏感	13.4			<*	<*
なにもをしても楽しくない	1.3				<***
気持ちを家族や友達が理解せず	4.3	<*	<***		<*
なにもしたくない	10.6		<*		<*
劣等感をもつ	8.9		<*		
将来に希望がない	4.0		<*		
死にたい気持ちになる	3.5		<*		
朝、登校がいやなことあり	4.6	<*	<***	<*	
朝、起きたとき気分がよくない	4.6	<***	<****	<*	<***
勉強に意欲がない	8.3	<*	<****	<****	<*
勉強は解らないことが多い	10.3		<*	<*	
友達関係がうまくいっていない	2.2		<*	<*	<*
疲れた感じ	11.1	<*	<*		<*
吐き気がすることがある	1.5	<*	<*	<*	<*
身体のアチこちが痛む	4.3		<*	<*	<*
急に体が熱かったり寒かったり	5.0	>*			
身体がしびれる	2.6		<*		<*
いじめられたことがある	3.2	<***	<***	<****	

* P<0.05
 ** P<0.001
 *** P<0.0001
 **** P<0.00001

(不等号の方向は%の大小を示す)

表9 1995年度の愁訴頻度と1990～1994年度の比較（西尾市外4中学）

項 目	1995年 %	1994年	1993年	1992年	1990年
集中できない	12.0	>*			
テストが気になる	19.2	>*	>*		>*
受験を家族が心配するのが負担	10.0	>*			
なにをしても楽しくない	1.6		<*		
気持ちを家族や友達を理解せず	9.3			>*	>*
劣等感をもつ	15.0				>*
将来に希望がない	4.7		<*		<*
勉強に意欲がない	16.3	>*			
勉強が解らない	14.1	>*			
友達関係がうまくいっていない	2.9	<*	<*		
疲れた感じ	22.4	>*			
口がカラカラに乾くことあり	8.3		<*		
吐き気がすることがある	3.1		<*		<*
テストになると下痢をする	0.7	<*			
首・肩がこる	19.0	>*			
身体のあちこちが痛む	9.4	>*	<*		
心臓がドキドキすることがある	9.3		<*		
急に体が熱かったり寒かったり	5.6		<*		
いじめられたことがある	6.2			>*	

*P>0.05

(不等号の方向は%の大小を示す)

④市外校間の年度別の差（表9）

西尾市内校と異なって、市外校の1995年度は他の年度より増加項目が多くみられた。1995年度と1994年度で差があったのは10項目であり、そのうち8項目で1995年度が増加し、減少していたのは「友達関係がうまくいっていない」、「テストになると下痢をする」の2項目であった。1993年度は、増加項目が多く、9項目中8項目で1993年度が増加している。「テストが気になる」のみが1993年度が減少していた。1992年度は差があったのは2項目で「自分の気持ちを家族や友達を理解してくれない」、「いじめられたことがある」が1995年度に増加していた。1990年度は、5項目中「テストが気になる」、「自分の気持ちを家族や友達を理解してくれない」、「劣等感をもつ」の3項目で1995年度が多かった。すなわち、1994・1992・1990年度では、1995年度の方が愁訴の増加項目は多いが1993年度のみは愁訴率が高く、これは市内校でもみられた傾向である。

2. 教師との交流について

1991年に西尾市の教育委員会を通じて心因性疾患児（PSD）について、教師の意識調査を行った。意識調査の対象は、小中学教師368例で、中学6校、小学14校の20校であり、養護教諭は20例が含まれていた。アンケートの内容で養護教師と医師の交流では、PSDの対応として、中学6校中5校、小学校14校中4校が医師受診を薦めているが、PSDの対応先として校医を薦めることは少なく、校医以外が多かった。教師としては、医師側の対応に満足と答えたのは1/3以下であった。医師との連絡方法については、教師のコメントにも示されているように、教師は医師との連携を希望しているが、出来にくいという認識がうかがわれる。—教師からのコメントを参照（表10・11）—。

3. 考察とまとめ

性別・地域別・年次別の不定愁訴アンケート結果は、性別では、市内・市外校ともに女兒に愁訴

表10 小学校の教師からのコメント

- 1) 医師との連絡方法について
 - ・学校と連携をもってほしい
 - ・医師と連絡がとりにくい
 - ・養護教諭と相談して医師に紹介する
- 2) 医師への希望
 - ・対処の方法を教えてほしい
 - ・なおしてほしい
 - ・カウンセリングを教えてほしい
 - ・現状と未来像が知りたい
 - ・親や子供が納得する様に話してほしい
 - ・専門医の増加を希望
 - ・医師はその立場で、担任は独自に指導する
- 3) 情報交換できる組織作り
 - ・研究会などの情報交換や、積極的に気軽に、相談できるシステムがほしい

は多く、両校群とも女兒は「めまい、立ちくらみ」が多かった。地域別では、西尾市内校の愁訴は、市外校に比べより少ないこと。年次別では、市内校の1995年度は愁訴が少なくなっており、特に、登校の問題、いじめの訴えが少なくなっていることは、環境の調整がなされているように推測された。これに反して市外校では訴えは多く、1994年度よりも1995年度に増加した項目が多かった。「勉強に意欲がない」、「勉強が解らない」、「テストが気になる」、「受験を家族が心配するのが心の負担」、「疲れた感じ」などからは田舎町ののんびりした様子がみられない。

教師との対応では、教師の意識調査を踏まえ、不定愁訴アンケート調査の事後指導を行うことで話し合う回数も増した。筆者自身も以前より気楽に教師と対話が出来るようになった。しかし、事後指導のみでは不十分なため筆者は1~2ヵ月に一回「養護教諭とのつどい」を西尾市内校の教師と

表11 中学校の教師からのコメント

- 1) 時間的に対応は無理、フリーの先生がほしい
- 2) 医師との連絡方法について
 - ・直接連絡できるとよい
 - ・公式ルートでの対応の方法がしりたい
 - ・医師との接触が度々出来るとよい
 - ・校医は忙しいのではないか
 - ・医師と定期的な情報交換ができるとよい
 - ・精神科への紹介はためられる
- 3) 医師への希望
 - ・医学と教育のギャップを考えて
 - ・親切にしてほしい
 - ・現場に即してなく、的外れである
 - ・学校批判をしないで
 - ・子供の気持ちを和らげて
 - ・原因の追究をしてほしい
 - ・心因性疾患に力を注いでほしい
 - ・話をよく聞いてほしい
- 4) 資料、テストの方法が知りたい
- 5) 専門の機関がほしい
 - ・市民病院に心療内科がほしい
 - ・相談の機関がほしい
 - ・心因性疾患に詳しい医師に相談したい
- 6) 教師間、親、医師の間で共通理解ができにくい
- 7) 医師との相談は考えていなかった、今後、相談する

行うことにしている。事例検討会といった、型にはめたことではなく、困ったケースを遠慮なく話し合うという「つどい」である。そこでの成果は未だ不明であるが今後も続けたいと考えている。

【文 献】

- 1) 石川道子, 斎藤久子, 井口敏之: 地域の中での小児心身医療(1) - 中学1年生の不定愁訴のアンケート調査より - 児心身医 2: 6-13, 1993.
- 2) 井口敏之, 石川道子, 斎藤久子: 地域の中での小児心身医療(2) - 教師へのアンケート調査より - 児心身医 2: 15-20, 1993.